
忘れていたこと、忘れなかったこと

赤いからす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れていたこと、忘れなかったこと

【Nコード】

N6436C

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

ユウキ、ツバサ、トモヤ、ノリ子の4人は26年振りに卒業した中学校へタイムカプセルを掘り起こしにやってきた。そして、過去の重大な過ちに気づくが…。

計画を実行するにはこの上ない条件が揃っていた。校庭内に静かに滑り込ませた車から降りてきた4人は霧に煙る景色を見て胸をなで下ろした。校庭から見下ろした町は真っ白く覆われ、学校全体を目隠ししている。

ユウキが誇らしげに言った。

「これなら気づかれる心配はない」

「そうだな」

「うん」

「そうね」

ツバサ、トモヤ、ノリ子の3人も同調して素早く返事をかえす。

「早くとりかかろう」

車から剣先スコップを3本出して校舎に近づいた。

「かわらないなあ」

赤茶色の瓦屋根、平屋の木造の校舎を見てユウキが懐かしそうにこぼす。

「あそこだ」

トモヤが校舎の北側を指差した。錆びた鉄棒と黄色、青、赤などに塗られたタイヤが半分埋められた『タイヤとび』といわれる粗末な遊具が設置されている場所は子供が遊びに来るのを諦めてしまつたかのようにひっそりとしている。

「警備の人に見られたらどうするの？」

ノリ子が心配そうにみんなに尋ねる。

「タイムカプセルを掘ってるんだと正直に話せばわかってもらえる

さ」

「でもお」

トモヤの答えにノリ子はあまり納得していない様子。

「みんなで頭を下げれば問題はこじれないよ」

ユウキの楽観的な態度はノリ子を黙らせる効果があった。

「ええ」と、確かここから15歩校舎へ進んだところだったな「ユウキが黄色い『タイヤとび』から歩き始め、足をとめると『ここだな』とスコップを地面に突き刺す。

「いまのユウキと中学生のときのユウキを考えたら歩幅は長くなっているか？2歩くらいさがったところじゃないかな」

それまで口数が少なかったツバサが静かな声で指摘した。

「おまえはいつも冷静だな」

ユウキは苦笑いして言われたとおり2歩さがったところへ移動する。

「さすが官僚」

トモヤが茶化し気味にツバサを持ち上げた。

「よし掘ろうぜ」

男3人が黙々と土を掘りはじめた。

「来年、校舎を取り壊してなにが建つんだ？」

トモヤが誰にでもなく尋ねる。

「大手のショッピングセンターらしいぜ」

ユウキが手を休め、汗を拭いながら答えた。

「あと4年はタイムカプセルを掘らないつもりだったのに計画が狂っちゃったね」

ノリ子はしゃがんで3人の働きぶりを監視していた。

しばらくするとカチツとスコップの先が何かに当たった。トモヤが素手で土を退けると座布団一枚分くらいでアルミ製の上蓋が姿を見せた。

「26年振りのご対面だ」

トモヤが歓喜の声を上げ、上蓋を外そうとしたが、収縮されたのか蓋の溝が本体へとガツチリ食い込んで離さない。半分くらい掘って引き上げてからスコップの剣先で蓋をこじ開けようとしたが、男3人が力を合わせ、タイムカプセルにしがみついて動かそうとしてもビクともしない。

「重いな……タイムカプセルを埋めた当日の新聞だとか、あとは野球道具などのガラクタと手紙しか入れなかったよな？」

トモヤがみんなに向かつて訊く。

「30年後の自分に宛てた手紙を5人で朗読し合うようにというのが約束だった」

ユウキが補足する。

「そうそう5人で……」

と言ったあと、トモヤが絶句した。

「あと1人、誰だ？」

ユウキが動揺する。

「ミサキさんだよ。まさか、みんな忘れてたのか？」

ツバサは3人の顔を見回した。

「いまのいままで忘れていた」

ユウキの手からスコップが滑り落ちた。

「あれは事故だったんだ……」

トモヤが俯いてポツリと囁く。

「気にすることないさ。掘っているときに後ろでボツーとしていたミサキに気づかなくてスコップが頭に刺さってしまったんだから」

「そうよ」

「時効は成立しているんだから。そんなに落ち込むことないさ」

ユウキとノリ子が慰めの言葉をかける。

「おれはてっきりミサキさんの遺体をどこかに移動させると思って

やってきたんだぞ」

ツバサは冷たい視線を皆に送った。

「どうりで重いわけだ」

「あのときは掘っていた穴にちょうどミサキが落ちてそのままタイムカプセルに入れちゃえということになったんだよな」

ツバサから視線を逸らし、ユウキとトモヤは言い訳を口にした。

「でも、タイムカプセルを見るまでミサキさんのことを忘れていたなんて……おとなしくて目立たない子だったけど……私たちって薄情な人間だわ」

ノリ子が遠い目をして呟く。

「まずいぞ、誰かくる！急いで土をかぶせるんだ！」

それまで冷静だったツバサが小さな声に焦りを滲ませて指示を出し、上蓋に土をかけた。

「君たち、なにしてるんだ？」

作業服を着た初老の男が4人に向かってきた。

「ぼくたちここの中学校の卒業生でタイムカプセルを掘り起こしていたところなんです」

ユウキが頭をかきながら答えた。

「ワシはここで用務員をしている者だが、作業をはじめる前にせめて声をかけてくれないと困るな」

「すいません。昨夜、飲んでいたノリで急に掘り起こそうという話になって車を飛ばしてきたんです」

「そうか。ところでタイムカプセルは見つかったのか？」

用務員のオジさんが穴を覗き込んだ。

「見当違いのところを掘ってしまったたらしくて……すいません。す

ぐに穴を埋めます」

それまで嘘を並べていたユウキにかわってツバサが頭を下げた。

「手伝おうか？」

「いいえ、すぐに終わりますから」

「他の場所に心当たりがあるなら掘ってもいいぞ」

そう言って用務員のオジさんは4人から離れていった。

「あぶなかった」

「でも、これからどうするの？」

「今日はやめだ」

「あのオジさんが休みの日を狙えがいい」

4人が小さな輪になって相談していると再び用務員のオジさんがやって来た。

「また来た……なんの用だろう？」

ノリ子の震える声に男3人は応えることができなかった。

「コーヒーでも飲んで休みな」

用務員のオジさんは紙コップをそれぞれに手渡すと、ポットから湯気のたったコーヒーを注いで勧めた。

4人はコーヒーを喉へ流し込んだが、全員が温かみは感じられなかった。

「ところで4人がここに知っていることを知っている人は他にいいのかい？」

用務員のオジさんが白い歯を見せて尋ねた。

「いいえ」

トモヤが首を横に振った。

・
・
・

数時間後、校舎の管理人室で頭に白髪が目立つ男が両手について頭を下げた。

「ありがとうございます」

「とんでもありません」

用務員のオジさんは恐縮した。

「あなたが8年前に娘の死体を発見して最初に連絡してくれたおかげです」

白髪の男の目は心なしか潤んでいた。

「犯人がこの学校の関係者なら埋めた場所に必ず戻ってくると思っていましたから。ちよつと時間がかかってしまいましたね。タイムカプセルの手紙を見つけたときはすぐに犯人の目星がつくと思ったのにすべて愛称で書かれていたから名簿と照らし合わせてもよくわからなかった」

「あのときは取り乱してしまいました」

白髪の男はタイムカプセルの中で冷たくなっていた自分の娘に触れるどころか見ることもさえできなかった。現実を受け入れず放心状態で復讐心をたぎらせ、手紙から犯人に辿り着けなかった悔しさで暴れた過去の出来事を詫びた。

「あなたも大変でしたね。大手のショッピングセンターが建つなんて噂を町中に流したり、逆にここの校舎がそのまま郷土館として使われる計画を秘密にするなんて苦労したでしょう」

用務員のオジさんは白髪の男の肩をやさしく叩いた。

「役場の助役という仕事柄たやすいことですよ。それに娘のためを思えば……」

白髪の男は言葉を詰まらせた。

「お気の毒に……」

「でも、睡眠薬入りのコーヒーを疑いもなくよく飲んでくれましたね？」

「あの4人には寒気が走っていたんじゃないですか。だから温かいコーヒーに手を伸ばしてしまっただんです。この日のために用意しと

いてよかった」

そう言うつと用務員のオジさんは安堵のため息をもらす。

「すいません。なにからなにまでお世話になってしまって」

「実は私も胸がスウーとしてるんですよ。あの時代の生徒たちは校内暴力がひどくって私も意味もなく殴られたもんです。見てくださ
いよ、この傷はもう消えない」

用務員のオジさんは作業ズボンの裾を捲ると赤黒い大きな痣を見せて愛おしく擦った。

「大変だったんですね」

白髪の男は心から同情した。

「あなたにくらべたら……」

用務員のオジさんは言葉が続かなかった。

「ところで、死体が増えたら臭いませんか？」

「大丈夫です。明日からウサギ小屋をつくろうかと思っています」

「お手伝いしますよ」

それから二人は祝杯をかわすように酒の入ったガラスコップを力
チンと鳴らした。

了

（後書き）

他にもホラー（短編）で「水たまり」「娘、お盆に帰る」「人類、最後の言葉」「彼女の好きなモノ」など多数投稿しています。ホラー（連載）では「無期限の標的」「狂犬病予防業務日誌」を投稿しています。恋愛（短編）でも「木漏れ日から見詰めて」という作品を投稿していますが、いずれも意外な結末がウリです。ぜひ読んでくれた方は感想と評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6436c/>

忘れていたこと、忘れなかったこと

2010年12月19日02時19分発行